

第三章 魔術の知

第I章でデッラ・ポルタを論じたときに、「人間の知と技が介在して対象（自然）に何らかの効果を与えるのが魔術なのである」と記したが、ここでいう効果とは世界に対する実質的変化の意味である。つまり地上の世界をまず知悉し、操作しようというわけであるが、自然界に法則性を見出してやがて支配へと至った近代自然科学とちがって、魔術の場合はあくまで自然と調和を測りながらの作業である。

こうした見地に立つ魔術の知はいかようにしてルネサンス期に盛んになったかを少し述べてみよう。もともと古代より存在した知的潮流であったが、その反キリスト教的傾向ゆえに、中世末異端のレッテルを貼られて迫害され、地下の水脈を生きつづけてきた。

魔術の知の骨格を形作った思想は新プラトン主義（第一の神である一者が下位の神に分身となって宿る還流の思想。一者は太陽とみなされる）、ヘルメス思想（太陽を万物の中心に据え、大宇宙と小宇宙の照応、生命の有機的調和を図った思想）であるが、早い話、これら紀元後二、三世紀頃の文献がルネサンス期に、その理念の一つである古代の復興に基づいて、蘇ったのである。

その最大の原因は、フィレンツェの哲学者マルシーリオ・フィチーノが完成させたその種の文献の翻訳に拠るところが大きい。彼はコジモ・デ・メディチの要請によってプラトンの著作、また新プラトン主義の源であるプロティノスの『エネアデス』、さらに「アスクレピオス」や「ポイマンドレス」を含む『ヘルメス文書』のラテン語訳を実現した。

フィチーノはこれを、アウグスチヌス以来の伝統的解釈に従って、実際とは異なるのだが、プラトンやアリストテレスよりも古い太古のエジプトの書と解釈した。この解釈が後世に甚大な影響を与えることになる。なぜなら古典への回帰を一大特色とするルネサンス期にあって、太古の書、それも『聖書』よりも古い教智の書なるものが錯誤のうえであれ見出されたことは、人びとにとっての思想的源泉、精神的滋養が生まれたことに等しく、知識人たちはみなフィチーノによる翻訳を精読・味読した。

ここに魔術の知が表舞台上に躍り出て、ルネサンス期をはじめとして、以後近代社会の思潮にも根深く着床することになる。

本章では、まずちょっと毛色の変わった試みとして、『デカメロン』中で最も有名な説話であるカランドリーノ説話群を取り上げて、人間という自然Vを見つめて、そこに魔術的要素を探りたい。

というのも、医術（学）を除けば、魔術にせよ、近代自然科学にせよ、対象は人間以外の自然であるからである。それは身近な昆虫や家畜や植物から天空などの宇宙をも含む全自然界である。ならば人間はどのようなのであるか。人間もこの大宇宙の一部であって、マクロコスモスと照応・感応するミクロコスモスであるからには、人間という自然Vも存在して当然であり、特に自然を有機的全体と考え、自然と人間とは調和の状態にあるとする自然魔術においては、人間の中に自然Vを探究していく志向性が見出されるのは首肯できよう。英語ではヒューマン・ネイチャー (human nature) が文字通り人間性（人間らしさ）、人間の自然本性）を表わし、イタリア語ではウマニタ (umaita) がナトゥーラ・ウマーナ (natura umana)、つまり人間という自然Vを表わして、人間性を意味している。

人間という自然V、つまり人間の中の自然性が十全に発揮されて人間らしさを顕現せしめうるのは、いったいどの時代からかを考えてみたい。同時に人間らしさを最も端的に顕わしうる食欲、性欲などの本能性、「欲」にスポットを当ててみたい。古典古代はさておき、中世以来「欲」が肯定的に捉えられたのはいつの頃からなのか。

ダンテ『神曲』の煉獄篇V第十九歌、二十歌は煉獄の山の第五の環道を詠っており、浄められている罪は

「食欲」である。「食欲」は非とされ、第五の環道で浄化されるべきものである。たとえば教皇アドリアノ（ハドリアヌス）五世は食欲の罪で腹ばいにさせられている。

食欲の仕業がいかなるものかは、悔悛した人々がここで罪を浄めるさまを見ればよくわかるが、これほど苦く苦しい罰はこの山ではほかにないだろう。

私々の目は生前、地上のものに吸いつけられ、／天を仰ごうとしなかったから、それで／（神の）正義がここで私々の目を地面へ押しつける^{こら}。

これを読む限り、ダンテの意識の中では欲は否定的に捉えられており、神の正義に相反する罪とされている。中世の七元徳の一つである節制の徳を基調とした考え方であろう。

『神曲』では食欲のみならず、大食欲、色欲など、こと欲に関するものは罪とされている。清貧、節制を旨とする使徒的世界が窺える。

やはり『神曲』は神の世界を描いた作品であり、断罪という厳格な神の裁きが見られる。そこにこの世に生きるいきいきとした人間の世界はない。その躍動性を現世にまで引き下ろして活写したのがボッカッチョ『デカメロン』である。

『デカメロン』の中の人物は、欲を思う存分發揮して、よもやそのことを罪だとはみなしていない。しかしこの自由奔放さの陰には、ペストによる無数の人びとの死が潜在していて、『デカメロン』の統一的イメージに粘まりを与えていることを忘れてはならない。そしてこの濃縮された死のイメージが、精神的な枯渇死ではなくて、ペストが原因の肉体そのものの死であるという事実が、作者の視線を物質的な飲み食いや排泄といった下世話な描写へと向かわせる。

そこからは勢いグロテスクな世界が立ち現われる。肉体の死という世界は、性や生殖や欲の世界とは背中合わせでもある。『デカメロン』がしばしば好色文学と評される要因はここらあたりの事情が関係してくるけれども、『デカメロン』のエロティシズムは死の対極としてのグロテスクな豊饒であって、頹廃しているのは当時の現実社会、とりわけ支配者階層の人たちの方である。

ボッカッチョは現実を凝視している。描かれたエピソードは中世を舞台としたものがほとんどであるが、作者の意識は純く現実的・ルネサンス的である。

百話を書き終えた結びの言葉として、作者は淡々と次のように述べている。少し長いが味読してほしい。

普段、穴とか栓とか、臼とか杵とか、腸詰とか卵形腸詰とか、これに似た多くのことを口にすることが、紳士や貴婦人の方々には一般にいけないとされているのですが、私が書いたのはそれほどいけないことではなかったはずだと申しておきましょう。……

これらのことはすべてが非常に貞淑な心や言葉で語らねばならない教会の中にも、さらにまた貞淑がほかのどこにも劣らざる必要とされている哲学者の学校の中でも、またいかなる場所の聖職者たちや他の哲学者の間でも話されるものでなく、庭園の中や娯楽の場所で話されるものであり、相当分別があってそれに夢中にはならずとも、主として青年たちの間で話されるものです。また最も貞淑な人々にとっても、一命を守るためには頭に下着と被って逃げ出さざるをえない時世に話されたものであることは明らかなのです^{こと}。

（傍点——澤井）

このように『デカメロン』の基調となる状況、場、時が明らかにされている。これらが、作中に散りばめられている率直かつ大胆な言葉や表現、非公式なイメージを生む必要条件なのである。これまでの生真面目な世界を

支離していた理念を表現する用語や形式では収まりきれない言葉や思想、そして場が必要となってくる。新しい言葉や思想、場とは、教会の中に対して広場（庭、中庭）のような外の世界であり、魂に対して肉体であり、聖職者や貴族に対して民衆なのである。つまり、広場、声を上げて交わす率直な会話、肉体の豊かさ、エロティシズム、グロテスク、民衆の活気や欲望が顕現する言葉、思想、表現などである。民衆による祝祭的気分が間近に感じられてはしまいか。

パフチーンは、こうしたボッカッチョの拠って立つ執筆の立場を巧みにまとめてくれている。それは表現上のアメリカ（新大陸）の発見と探求であり、「世界がその別の面から自分に立ち返ることの出来る」場の設定だという。民衆の祝祭的な、外へ外へと向かっていく自由奔放さと、内面的な自由——人生肯定的な自由が複合する場だとも言う。

ここでは『デカメロン』のこうした面をカランドリーノ説話群の中に実際に探ってみよう。

カランドリーノ説話群の次は、ルネサンス末期の哲人カンパネッラの描いた魔術的世界である『太陽の都』と、彼の魔術的知的営為の代表的所産である、天動説と地動説を巡っての書『ガリレオの弁明』を熟読して、時代の中での魔術の知の悲喜劇を述べるつもりである。

1 カランドリーノ説話群

『ノヴェッリーノ』の第二話に、フェデリコ二世と伝説上の人物プレスター・ジョヴァンニの二人の登場する物語が編まれている。そこに二人のあいだを取り持つ小道具として、三つの宝石が登場する。この三つの中の一つが所有者を透明にしよう石——エリトロピア——とされている。この石の話は『デカメロン』の八日目第三話にも、同じく所有者を透明にする効能を持つ石として現われ、物語の中で重要な役割を担っている。

八日目第三話は『デカメロン』の全百話の中で特に有名なカランドリーノ説話群 *ciclo di Calandrino* (他に八日目第六話、八日目第九話、九日目第三話、九日目第五話) の中のひとつで、「愚弄・嘲笑のノヴェッラ *novelle della befata* の代表格と言われている。『デカメロン』百話を内容分類した場合、「悪賢い連中が、血のめぐりの悪い善人をだます物語」に区分けされ、作品中で最も評判の高いノヴェッラとみなされている。

ここでは、ともにエリトロピアの登場する二つのノヴェッラを比較対照しながら、まず、中世とルネサンスにおける、エリトロピアの意義、介在する喜劇性の有無を検討することで、祝祭性・寓意性を考えてみる。

エリトロピアの魔術性

まずエリトロピア *eritropia* とはそもそもいかなる石なのであろうか。プリニウスの『博物誌』に以下のような記述が見られる。

エティオピア、アフリカ、そしてキプロスで産するヘリオトロピウムは血玉髄はリーキの緑色であるが、血色の縞模様がある。この名前は、この石を水の入った器の中に落とし、明るい太陽光線を反射して血の色に変わるといふ事実によって説明される。このことは特に、エティオピア種について本当である。それを水から取り出すと、その同じ太陽光線を鏡のように捉え、月が太陽面に近づく通路を示して、日蝕を探知する。さらにここにマジ僧たちのずうずうしさもきわまった事例がある。連中は植物のヘリオトロピとこの石をいっしょにして、それにある祈りの言葉を唱えると、それを身につけている人の身体が眼に見えなくなるというのだ。